

2005年度（第7回）学生懸賞論文「女性学インスティテュート賞」

総 評

高 橋 友 子

今年度の「女性学インスティテュート賞」への応募は、7点ありました。夏休み中に審査委員が査読を行ない、9月21日の審査委員会にて、今年度は最優秀賞は該当者なし、優秀賞は2点という審査の結果になりました。優秀賞を受けた論文の内容と講評を、以下に紹介します。

船原まどかさん（2005年3月人間科学部人間科学科卒業）の「恋愛マニュアルとしての少女マンガ『天使なんかじゃない』を読み解く」は、矢沢あいの人気漫画『天使なんかじゃない』を分析対象として取りあげています。そして、なぜこの作品が女性の読者に支持されているのかという理由を、「恋愛とは信じること」「男に守られる幸せ」といったジェンダー・ステレオタイプの踏襲と再生産に見い出している点が、興味深いものでした。また、この作品の登場人物の恋愛観や異性観もきちんと説明され、論旨も明解でよくまとまっており、ジェンダー研究にふさわしい論文であると評価できます。

ただ、分析が主にこの作品のストーリーと登場人物のせりふに集中していて、焦点があいまいになってしまっている点が残念です。もう一步踏み込んで、なぜ女性の読者がこのような恋愛マニュアルに惹かれてしまうのかを十分に説明できていれば、より高い評価を得ることができたでしょう。また、漫画特有の表現である記号としての図像の分析に、十分に踏み込めていないと指摘する評者もいました。

橋本英子さん（2005年3月人間科学部人間科学科卒業）の「ヒッチコック映画で見る時代変遷—オリジナル版とリメイク版の比較」は、ヒッチコック監督の『サイコ』『ダイヤルMを廻せ!』の2作品を取りあげ、それぞれオリジナル版とリメイク版とをジェンダーの視点から比較分析し、そこに表象されている「時代変遷」（1950～1990年代）を読み解こうとした論文です。着眼点が

おもしろく、全体の構成も「問題」―「分析」―「考察」の順によく整理されているので、読み手には論旨が明解に受けとめられました。そして、ジェンダーの視点を踏まえながら、自分の眼を頼りにして、2作品のオリジナル版とリメイク版の比較を丁寧に分析し、分析の角度も男女関係、服装、性描写、演出効果といった幅広い分野で展開されているところが、評価できる点でした。

一方、惜しまれるのは、「問題」の部分でもっと先行研究や関連研究を整理し、映画史におけるオリジナル版とリメイク版の位置づけを明らかにすべきだという点と、「考察」の部分でジェンダーの視点が「男女関係」にしか活かされておらず、「性・暴力描写」と「演出効果」にまで浸透していないという点でした。また、「時代が違うから描写もこんなに違う」といった表面的な比較にとどまらず、それぞれの作品の時代背景をジェンダーの視点から考察すれば、もっとよい論文になったことでしょう。

昨年度に比べて今年度は応募が多くなったことを、女性学インスティテュートのディレクターとして喜ばしく思います。ただ、応募された論文の中には、女性学・ジェンダー研究とはまったく関係のないテーマのものもありました。応募されるにあたっては、まず女性学・ジェンダー研究がどのようなものであるかをもう一度把握したうえで、応募いただけるようお願いします。